



Title	経験の根源：トマス・アクィナスの形而上学 [全文の要約]
Author(s)	古館, 恵介
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12380号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/63425">http://hdl.handle.net/2115/63425</a>
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	<a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
File Information	Keisuke_Furudate_summary.pdf



[Instructions for use](#)

古代ギリシアのパルメニデスは、「有るものは不生なるものゆえ、不滅なるもの」（山本光雄訳編『初期ギリシア哲学者断片集』、岩波書店、1985年）（ἀγέννητον ἐὼν καὶ ἀνώλεθρόν ἐστιν, DK. 28 B8）と言っている。

では「有るもの」が不生不滅であるとはいかなることだろうか。今日の我々は、かつて生成しやがて消滅するものをも、「有るもの」と見なしているはずだが、それは実は「有るもの」ではなかったのだろうか。それとも「有るもの」は生成消滅しているように見えて、実は生成も消滅もしていなかったのだろうか。

パルメニデスは「有るもの」（ἐὼν）に対して特別な洞察を持っていた。その洞察は現代に生きる人々にも衝撃を与え続けている。その衝撃は「有るもの」に対する見方を変えさせるに足るものである。しかしそれにしても、「有るもの」が不生不滅であるというのは、現代の見方とはあまりにもかけ離れてはいないだろうか。もしかするとパルメニデスは、「有るもの」が不生不滅と喝破したのではなく、それとは別の何ものかが不生不滅であると言ったのではないか。

ギリシア語の「有るもの」（ὄν、古形 ἐὼν）は、中世においては *ens* とラテン訳された。トマス・アクィナスの『真理論』1問1項によると、*ens* とは、人間の知性が最初に、最もよく知られているものとして捉え、すべての概念をそれへと遡源するものであるという。この *ens* が「有るもの」だとすると、例えばキマイラ概念と知性の関係はどうなるのだろうか。少なくとも、普通の人間は「キマイラ」という言葉を使うことができるが、ではその人はキマイラを知っていると言えるのだろうか。言えるとなれば、キマイラは「有るもの」なのだろうか。また、知っているとは言えないなら、知らないものを指す言葉を自然に使うことができるのはなぜなのだろうか。このような問題を解決するのが、哲学に課せられた仕事の一つであろう。しかし『真理論』1問1項は、この素朴な疑問には全く答えずに進んでいく。しかも『真理論』に限らず、トマスは基本的にキマイラと「有るもの」（*ens*）の関係についてはあまり多くを語らない。トマスは「有るもの」（*ens*）を論じるためにはそれで十分だと考えていたのか。それとも、そもそも「有るもの」を論じてはいないがゆえに、こうした問題が生じなかったのではないだろうか。

ギリシア語とラテン語の *be* 動詞（εἶναι, *esse*）とその現在分詞（ὄν, *ens*）は、通常は「存在」と訳される。しかしその「存在」についての上記のパルメニデスやトマスの発言は、哲学者ならぬ普通の話者に対してはかなりの違和感を引き起こすものである。この違和感はや、*「存在」*に対する見解の相異、というレベルを超えてはいないだろうか。上記のパルメニデスの邦訳が、「存在」という訳語を避けているのは、その違和感への配慮ではないだろうか。

本研究の目的は、中世スコラ哲学の大成者トマス・アクィナスの *esse* と *ens* を、「存在」という語を用いずに解釈し、それが「存在」よりもさらに根源的な次元を示しているということを明らかにすることである。

第1章では、トマスの *esse* に関する20世紀の主要な学説を概観する。20世紀を三つの時期にわけ、第一期を19世紀末から1930年まで、第二期を1930年から1980年まで、第三期を1930年以後とする。このうち特に第二期は、現代のトマス研究の成立期であり、*esse*

を「存在」(existence)と解釈するジルソン、esseを「完全性」と解釈するファブロ、esseを「原肯定」(Ur-Ja)と解釈するロットの研究が現れた。現代のesse研究はこれらの学説の統合・発展というかたちで進められている。我々の研究はこれらの諸解釈のうち、esseは「存在」(existence)ではないとするファブロとロットの説をさらに発展させるかたちで進む。

第2章では、定動詞estについてのトマスの見解を明らかにする。トマスによれば、人間の知性が主語と述語を結合して“S est P (S is P)”という命題を形成する際に、知性は事物のesseを把握するという(『ボエティウス三位一体論註解』5問3項)。ではそのesseとは、結局のところいかなるものなのであろうか。言い換えれば、“S est P”という命題における、“est”だけを単独で捉えた場合に、それは何を意味しているのであろうか。トマスがこのことについて最も詳細に論じたのは『命題論註解』である。その中でもジルソンが特に注目したのは、「estは知性のうちに無条件的に(absolute)現実性(actualitas)として入ってくるものを第一に表示する」(1巻5講)という言葉である。ここに言われた無条件的な現実性のことを、ジルソンは、しかしかが「存在する」と言われるときの意味での「存在」として解釈し、その後多くの研究者がこれに従った(Etienne Gilson, *Le Thomisme: Introduction à la philosophie de Saint Thomas d'Aquin*, 6e éd., Vrin, 1965, p. 184)。そしてこの言葉こそ、ジルソンがesseを「存在」(existence)と訳すテキスト上の根拠なのである。

これに対して我が国の長倉久子は、esseは「存在」ではなく日本語の助動詞「だ」に相当するという異色の解釈を示している(『トマス・アクィナスのエッセ研究』、知泉書館、2009年)。長倉はこの結論を導くために、『命題論註解』1巻5講における定動詞estについての議論が、それに先立つ動詞一般の分析の延長上にあるという点に注目する。長倉の整理によれば、トマスがあげている動詞の機能は次の三点、すなわち、①作用(actio)を表示すること、②時間を併せ表示すること、③述語として用いられること、である。そしてトマスの、「すべての定動詞はesseを含意している。例えば〈走ること〉(currere)は〈走るものがあること〉(currentem esse)である」(『命題論註解』1巻5講)や、「何かが述語づけられるのと同じだけ、何かがあるということが表示される」(『形而上学註解』5巻9講)などの言葉からすると、トマスは通常の動詞による述語づけと、estによる述語づけの両方を含めた述語づけ一般の成立を、esseの表示の成立として理解していたと考えることができる。そして長倉は、この、述語づけ一般の成立によって表示されるものこそ、『命題論註解』において無条件的な現実性と呼ばれていたものに他ならないというのである。

我々の研究は基本的に長倉の解釈を支持するものである。しかし、長倉が言う「現実」には、トマスが「現実」(actus, actualitas)と呼んだもののみならず、トマスが「事物」(res)と呼んだものも多分に含まれている。すなわち長倉は、述語づけによって成立した文と対応してその文の真偽の基準となるものを、「現実」と呼んでいる。しかしトマスは、文と対応して真偽の基準となるものを、「現実」(actus, actualitas)とは呼ばずに「事物」(res)と呼んでいるのである。そこで我々の研究においては、『命題論註解』で言われる「現実性」(actualitas)に対して、長倉が言う意味での、あるいは今日一般的に言われる意味での「現実」とは異なる解釈を与えることを試みる。

すなわち、est の特質が基本的に動詞一般の特質から抽出されるものであること、その限りで、動詞が持つ重要な特質である「述語づけ」という機能を純粋な形で取り出したものが est であるということ、この点については長倉に異論はない。しかるに長倉は述語づけが成立して文が成立すると、その文が文の外にある「現実」に対応すると考えたのであるが、我々は、トマスが言う「現実性」とは、定動詞 est をはじめとする、動詞一般が持つ述語性そのもののことであると解釈する。したがって我々の結論としては、『命題論註解』1 巻 5 講における単独で言われた est とは、何らの概念をも表示しないがなお述語であるものであると解釈したい。人間の知性は、述語づけを行い、命題を形成する。命題は真偽を表示することで、事物 (res) との対応関係を持つ。これはもはや説明の出来ない、原初的な事実である。通常はこの事実は、「述語づけ」という要素と、その述語によって表示される「概念」という要素の複合によって成立している。そこから概念という要素を捨象して残る純粋な述語づけを、トマスは「単独で言われた est」として把握したのである。これが第 2 章の結論である。

以上、第 2 章の考察により、定動詞 est はそれ単独では「存在」を意味するわけではないということが明らかとなった。このことは、トマスにおいては不定法の esse や現在分詞の ens もまた「存在」を意味しないという可能性を示唆するであろう。しかしやはり、それはあくまで可能性の示唆にすぎず、実際にそれらが「存在」とは異なるということを示すためには、また別の考察が必要となる。そこで第 3 章からは考察対象を定動詞 est から現在分詞 ens に移す。まず第 3 章では、『ボエティウス三位一体論註解』に基づき、形而上学の主題が ens であるということを確認する。トマスによれば、思弁的な学はその主題が質料と運動から抽象されている段階に応じて、自然学、数学、形而上学に区別される。このうち形而上学の主題である ens が、質料からの抽象度が最も高いとされる。トマスはこのことを、「esse 的にも定義的にも質料に依存しない」と表現するが、ens が esse 的に質料に依存しない理由は、それが質料のうちにある場合もあるし、質料のうちでない場合もあるからであるという。この点については、すでに多くの先行研究の蓄積があり、我々も特に異論はない。しかし、「ens が質料なしにある場合がある」とはいかなることだろうか。神や天使のような、質料に依存しない ens もあるし、自然物のような、質料に依存する ens もある、ということであるのか。それとも、実例をあげることなく、ens そのものを分析することで、その非質料性を理解することができるのであろうか。先行研究においては、この点に決定的な答えが示されていないように思われる。なぜなら ens の非質料性に関する従来の研究は、あくまで学問論の研究にとどまり、形而上学そのものの遂行の中で ens の非質料性がいかに規定されているかを十分に論じてこなかったからである。我々は第 3 章においてこの問題点を指摘し、第 4 章以降の考察へつなげる。

第 4 章においては、『真理論』1 問 1 項における ens の規定を検討する。それによれば ens とは、あらゆる概念構成の出発点であり、各々の概念は、ens が限定されたものとして理解することができるという。この規定についても、すでにエアツェンが詳細な註釈的研究を著しており、我々も特に異論はない (Jan A. Aertsen, *Medieval Philosophy and the Transcendentals: the Case of Thomas Aquinas*, Brill, 1996)。しかし『真理論』においては、ens のもう一つの重要な性格、質料なしにもあり得るといふのがいかなることであるかについては何も示されていない。そこで両者を同一の文脈で論じる著作を検討することが必要と

なる。

第5章において『形而上学註解』を検討する。アリストテレスは『形而上学』4巻1章において、「ens である限りの ens (τὸ ὄν ἢ ὄν, ens inquantum ens) を考察する何らかの学がある」(Met., 1003a21)と言った。またそのはるか先の9巻10章において、「ens そのもの (τὸ ὄν αὐτό, ipsum ens) は生成も消滅もしない。いったい何から生成するというのか」(Met., 1051b29-30)と言った。『形而上学註解』においてトマスは、この二つの発言の間に体系的な展開を見いだしている。膨大なトマスの著作群のうち、実にこの『形而上学註解』こそ、形而上学の主題は ens であるとする学問論から、ens そのものの具体的な議論までを体系的に展開した唯一の著作である。本章では『形而上学註解』に基づき、生成も消滅もしない ens そのものとは何かを明らかにしたい。

アリストテレスは、『形而上学』の7・8巻で実体を中心とする述語(カテゴリー)の諸形態を論じ、9巻の大部分で可能態・現実態を論じ来ったのに続いて、9巻10章において、これらを総括した結論部分として、「最も固有の意味での ens」について論じる。そしてアリストテレスは、「最も固有の意味での ens は、真や偽と言われる」(Met., 1051a34-b2)としており、真理論が ens 論の頂点をなすとしているのである。

ではなぜ、真理論は可能態・現実態を論じる9巻の10章で論じられなければならないのだろうか。それはトマスによれば、現実態においてあるものが、最も固有の意味で真や偽と言われるからである。

トマスは現実態においてあり、真や偽といわれるものを論じる9巻10章を、内容に従って三つの部分に分けている。すなわち、「結合したもの」における真偽を論じる部分と、「単純なもの」における真偽を論じる部分と、総括である。このうち特に、「単純実体」における真偽についての註解の中で、ens と「非質料的なもの」との関係が明らかになる。ではここでトマスが言う「単純なもの」とは何であろうか。

ここでの「単純なもの」が何を意味するかについては、解釈が分かれている。すなわち、純粹形相すなわち神を指すとする解釈と、命題と対比される単一の項、例えば「人間」や「白い」などを指す、とする解釈である。このうちのいずれが正しいかを明らかにするために、トマスが「単純」という言葉をいかなる意味で用いているかを精査していくと、次の三つの意味があぶりだされてくる。すなわち単純なものとは、まずは質料との結合を持たないという意味で単純であり、把握される際には命題というかたちをとらないという意味で単純であり、なおかつその定義の中には複数のものの結合を含まないという意味でも単純な、三つの意味で単純なものであった。しかしトマスは、その三つの意味で単純なものとは具体的に何であるのか、例えば神や天使であるのか、それともイデア的なものであるのか、そのいずれでもない何かであるのかについては、容易に決定することができない。

しかしある一節においてトマスは、形而上学の主題である ens がすなわち上述の三つの意味で単純なものであるということをほのめかす発言をする。そこでトマスは、単純実体が生成消滅しないということを示した後、その理由として、「ens である限りの端的な ens は、他のものから生成することができない」(9巻11講17節、Marietti版1911節)ということあげるのである。

この一節においては、ens がすなわち非質料的な実体であるということが示されている。『形而上学註解』で言われる非質料的な実体とえば、基本的には12巻で論じられる第一実

体と、天体の動きをつかさどる諸々の下位の分離実体である。これらは確かに、上述の三つの意味で単純であり、なおかつ生成消滅しないものである。しかし、9巻10章への註解においては、非質料的であることをはじめとする、分離実体のいくつかの性格が、12巻で論じられる分離実体以外に、「ens である限りの ens」にも適用されているのである。そこで論じられる「ens である限りの ens」の性格をもう少し詳しく述べれば、限定された個々の事物の根底にある、限定以前のものであり、したがってそれは定義において単純であり、質料とも結合しておらず、また知性がそれを把握するときには命題を形成しないという、三つの意味で単純なものであるという性格である。そしてこのように極度に単純なものである ens が持っている数少ない具体的な性格として、それが「知られることができる」ということがあり、人間の経験はすべてこの「知られるもの」が限定されたものとして解釈することができるのである。

終章においては第2章で明らかになった定動詞 est の性格と、第5章で明らかになった現在分詞 ens の性格とを総括し、両者の根底にある esse の解釈を示す。第2章においては、定動詞 est は概念無き述語づけであることが明らかになったが、それは要するに est が命題を成立させ、ひいては「真」を成立させるということである。また第5章においては、ens は「知られるもの」であるということが明らかになったが、トマスによれば「知られる」ということ自体が、命題の真とはまた別個の「真」であるという。したがって、est も ens も、ともに何らかの意味での「真」を成立させるという共通点を持っている。したがって本研究で考察された範囲では、esse とは、このいずれかの意味での真を成立させるものであると言えるであろう。